第２４回「ハートミーティング」意見交換の内容について

東山区役所市民サービス向上プロジェクトチーム

★参加メンバーからの主な声

○　国保の担当者として，制度について不満をお持ちの市民の方にも，丁寧に説明することで納得していただけるようになり，そのことが自分のやりがいになっているが，市長が思う現場でのやりがいとは何か？

○　ケースワーカーの仕事を通じて，国保の保険料が支払えないという相談が増えている。生活保護受給件数の増加や，地下鉄の赤字といった課題を抱える一方で歳入状況も厳しいのが実情である。今後の財政状況の改善策について考えをお聞かせいただきたい。

○　市職員として市民生活のためという使命感を持っているが，それ以前にひとりの人間であり，無力感に苛まれたり，モチベーションが下がるときもあると思うが，そうした時に市長はどのようにして自分を奮い立たせているのかお伺いしたい。また，市長の経験等から，若い職員時代に経験しておいたほうが良いことがあれば教えていただきたい。

○　学校が統廃合されることで学区の意識が薄れ，学区としての特色をどう伝えていけば良いか悩んでいる。また，廃校後の校舎やグラウンドについて，昼間は学校関係者，夜は地域住民がそれぞれ使用できるようにし，有効活用を図れないだろうか？

○　東日本大震災では，津波の被害によって市役所や町役場が壊滅状態になるなど，我々が想定し得ない事態が起こったわけだが，そうした際にパニックに陥らないために日ごろから何を心得ておけばよいか？

○　保健師としての立場で東山区を見ると，市内でも有数の観光地であるため地域住民にとっては住みづらい面が多い。また，高齢者向けの設備は充実している反面，小児科や育児用品を扱う店など子育てを支援する設備が少なく，東山区での子育てには難しい面があると感じている。市長は，地域を全体として捉える視点を持ちつつ仕事をする事が大切だと言われているが，全体を見る上で大切なことや注意することがあれば教えていただきたい。

★市長からのコメント

○　現場の第一線の市職員が市民の命や暮らしを支えている。ソフトとハードの両面から市民生活に関わる基盤を支えているということを実感する。どんな仕事も尊いものだが，市民と向き合う市職員の仕事はとても大切である。

○　市民生活を支えるものは安定した財政であり，長期的にもこれが維持されなければならないが，国は多額の借金を抱えており，国民は将来について非常に不安感を持っている。生活保護は国から保障された命を守る最後の砦であるが，適正な運用ができているかを考えた時，これまで以上に就業支援や制度改革の必要性を感じる。

　京都市は政令指定都市の中で生活保護受給件数の伸び率が最も低いが，これは第一線のケースワーカーの皆さんが，「必要な人に必要な支援を」との考え方に基づき，支援を適正に行っていることの表れであり，同時に徹底した就労支援が効果を挙げたものである。

○　ピンチに陥ったときは，心と頭を整理して，これをプラスにすることが自分の財産になる。皆さんであれば，住みやすい東山区を創ることにどう関わっていくか，それぞれの持ち場の仕事を専門性も高めながら丁寧にかつ本質を見極め，同時に他の職員の業務も把握するなど，自分の仕事の範囲を超えて考えることが必要である。

　日常の仕事では，自分の立場をひとつないし，ひとつ半ぐらい上，たとえば係員であれば，係長か係長と課長の間くらいにあると仮定して，その立場であれば自分がどう動けばいいかを考えて仕事をすることが大切である。

○　東山区では，学校統合によって学区意識がなくならないようと，一生懸命地元が活性化しており，学区意識は良い意味で残り，良いものはプラスになるよう残しながら新しいまちづくりが始まっている。

　統合された学校の跡地利用は，視野を広げて大きく見て欲しい。例えば龍池小学校だった京都国際マンガミュージアムは去年，ルーブル美術館と共同事業を行うことができるほどになった。地域を超えて，そこに何があったら東山区が良くなり，京都市が良くなり，世界の平和と発展に貢献できるかを考えて欲しい。

○　震災時への備えに関しては，ハード面の対策を重視しがちだが，実際の現場ではソフト面の対策が非常に大切である。